「英語と私」

島田直樹（仮名）

１．はじめに

寺島先生より準研究員の話を頂いた。どこまで自分でできるか分からないが、とにかくやらせて頂くことにした。課題の「英語と私」は自由提出と言われたが、せっかくなので簡単に書いてみようと思う。明日からは家内の実家に帰省するので、期限は本日中としたい。こういう自分史的なものは一日で一気に書き上げるのが良いと思い本日中に書き上げることに決めた。

２．中学時代

入学して数ヵ月後、三友社の『楽しい英文法』という本が配られた。私は教わってはいないが、当時私の通っていた中学校では S 先生というなんとか研究会の会長もやられた先生がいらしたのでその関係だったのかもしれない。全員に配られたのか、私（もしくは私の親）が希望して購入したのかはよく覚えていない。しかしその参考書を授業中に使うということは残念ながらなかったと思う。家で開いたのも数回しかなく、通読したのは教員になってからだった。

中学時代の英語の授業はほとんど覚えていない。だから担当の先生の名前も申し訳ないことに覚えていない。顔も思い出せないのだから、失礼極まりない。覚えているのは中一の夏休み前に「筆記体覚えておくように」と言われ、夏休み後は板書が全て筆記体になったことに少し驚き戸惑ったことぐらいだ。とりあえず授業で教われば内容は授業中にほとんど覚えられる程度の文法と語彙だったような気がする。中学時代に英語で困ることはほとんどなかった。中学時代、英語を含め勉強はそれなりにできたと思う。

校内暴力全盛期の時代で、私の母校も TV の取材がくるほど結構荒れていた。校内での喫煙やシンナーや喧嘩、授業不成立も当たり前だった。入学前、中学に行くのが怖いと思っていたのを覚えている。我々が中 3 の時は、下級生が暴力事件を起こして、文化祭が中止になってしまった。ちなみに高校に入ると、当時 A 中出身というだけで他の中学出身の生徒からは一目置かれるそんな中学校だった。

そんな雰囲気の学校だったので、いつも一緒にいた仲間の手前、勉強でトップ１０とかに入って掲示されて目立つのはなんとなく後ろめたく感じた。だから、本当にわざとテストでは数問間違えて順位が悪くなるようにしていた。

そんな中、中学 2 年の時に２学年クラス対抗英語暗誦大会があった。荒れている学校で良

くやったと今は思う。私のクラスの発表予定者が当日休むという暴挙に出た。何故か白羽の矢が私に当たり、何故か引き受けてしまった。担任は棄権で良いと言ったのを、友人達のイタズラ半分の推薦だったのに、私もイタズラ半分で引き受けたのだった。英文は確か「Mujina」だった。いきなり朝言われてその日の午後に言えるはずも無く、というより初めから覚えるつもりもなく、最初の一行だけ覚えて、それを言って、後はとりあえずしばし沈黙して、その後教科書広げて Read and Look up で読んで乗り切った。最低な代表だった。ただ目立ちたかっただけかもしれない。

中学時代、英語の授業はあまりよく覚えていないが、友人ととにかく洋楽を聞いた。本当は全く洋楽など興味なかったのだが、周りの連中が皆聞いているので、自分もとりあえず Tape にダビングしてもらって家ではそればかり聞いていた。英語に興味がなかったのか、あの頃はメロディーだけを楽しんでいた。サビの部分の意味さえ考えようとしなかったのが悔やまれる。洋楽で英語をものにした達人もいただろうに。ビートルズも中 1 の頃良く聞いた。学校の掃除の時間には、必ず LET　IT　Be が流れ、下校時間は YESTERDAY が流れていた気がする。いつも私は面白がって友人たちの前で LET IT BE を　「レドビー」と歌っていたので、中学時代の友人は私が「今英語の教師をしている」と言うと必ず笑い出したものだ。今思えばこの頃から、英語の個々の音は「変化する」ということをどうやら感覚的には皆知っていたようである。他にも例えばビリージョエルの「プレッシャー」が凄く流行っていた頃で、ビリージョエルは皆よく聞いていた気がする。マイケルジャクソンの曲やマドンナの「ライク・ア・ヴァージン」が流行ったのも私が中学生の頃だ。マドンナの曲はサビの Like a virgin, touched for the very first time が l, v, th, f, v, f の発音練習に良くて過激な歌詞の訳はやらなかったかもしれないが、英語の授業で紹介されたのを覚えている。でもその先生の顔も名前も思い出せないのだから、この頃英語には本当興味がなかったのだろう。

教科担当の先生の名前はあまり覚えていないが、さすがに担任の先生の名前は 3 年間覚えている。中学 1 年の時は M 先生。国語の先生。確か学年主任を兼ねていた。中学 2 年の時は Y 先生。若い美人な音楽の先生だったが、生徒が言うことを聞かず凄く苦労していた。我々がはじめての担任だったらしいが次の年に退職してしまった。中学 3 年の時の担任は、S 先生という人で新採 2 年目の若いバスケ部の先生だった。教科は社会と技術だった。この年のクラスは滅茶苦茶仲が良く、不良どもも含めて皆その先生が大好きだった。先生の家に数人で泊まりに行ったりしたこともあった。今考えると在校生が家に遊びに来て、家に泊めるなんて信じがたいが、今ではその先生は私の長男が通う中学の教頭先生となっているから面白い。我々が高校 1 年生の時、S 先生は結婚したのだがほぼクラス全員が集まって結婚式にも祝福に出向き合唱祭で歌った歌を送った。3 年の時の合唱祭は非常に盛り上がり、卒業式の日も教室で最後に親の前でこの曲を泣きながら歌った記憶がある。

高校受験では英語は、あまり家で勉強やらなくても大丈夫だった。授業中でだいたい覚えられたので一冊英語の問題集やっただけだった。勉強が苦手な友人を家に招き、勉強の面倒を見たりする余裕もあった。それでも当日は国語でしくじり、結構合格発表はドキドキしていた。一緒に受けた同じ中学の仲の良い友人たちは全滅してしまい、入学当初は本当に高校行く気がしなかった。実際何度もさぼって早退していた。

３．高校時代

高校は地元の進学校に通った。歴史ある伝統校だった。中学時代はわざと校内テストの時悪い点をとるようにしたと前述したが、高校はそんなに甘くなかった。最初にいきなり英語のテストがあり、なんと結果が学年の下位。200 番台だった。数学は小学校の頃から中学 1 年の途中頃まで公文に通っていたので、計算が早く得意だった。だから文理選択では理系に進んだ。高 1 の秋にサッカー部もやめてしまい、その後はギター弾いたり、ライブに行ったり、アルバイトしたりの駄目な高校生活だった。高 3 の夏休みも喫茶店でアルバイトしているという感じだったのだから今思えばあきれる。

英語の授業は最初の授業が印象的だった。N 先生という人が 1 時間全て英語で授業を行って、Good-by と言って出て行った。私は「さすが進学校。英語は外国人が授業するんだ。」と本気で思った。色白で顔もジョンレノンみたいな N 先生は、最初の授業で名前言ったのかもしれないが、私が聞き取れなかったのか本気で外国人だと思ったのだ。次の英語の授業が日本語だったのですごく安心したのを覚えている。読んで訳して音読してというオーソドックスな授業であったと思うが、時折英語の歌を紹介してくれた。N 先生はギターが得意で文化祭でも生徒と一緒にバンドをやっていたと思う。

2 年生の時のライティングの英語の先生は、名前は忘れたが毎回授業の最初に英語で短い話を数分してくれた。今思えば凄いことだと思う。生徒たちはそこの部分は良く聞いていた。無線をやる先生で、毎朝どこかの国の友人と英語で話をしているらしかった。この先生は凄く親切そうに見えた。当時の私は、もはや洋楽は全く聞かなくなっており、尾崎豊にはまっていた。この先生には尾崎豊の歌を英訳しろと今思えばとんでもないお願いを無愛想に頼みに行っていた記憶がある。数曲訳してもらって何故か満足していた。何のために英訳してもらっていたかは不明である。別に教師を試そうとか困らせようとか思っていたわけでもなく、毎回英語を難なく喋る先生ならすぐに訳せると思っていたのかもしれない。

高校 3 年の時は、O 先生だった。この先生は野球部の部長先生だった。当時我が母校は毎年甲子園にも手が届きそうな強豪だった。私が 3 年の時も県大会決勝まで行っている。卒業して数年後は見事甲子園に 2 年連続出場して M のいた S 高校と戦い破れた。英語の授業はというと全く覚えていない。というより受験生だったので？ほぼ毎回内職していた。怖

い先生だったので、内職の科目は皆英語。英語の時間に英語を内職していた最低の生徒達だった。リーダーの教科書を自分でどんどん読み進めていた。唯一この先生の授業で覚えているのは黒板におもむろに「魚男」と書いて、「woman の発音はウオ・マンとなるみたいだ。」と紹介してくれたこと。海外研修に行かれて戻ってきたときの土産話だった。この「魚男」は私も何度も教員になってから使わせてもらっている。おやじギャグが多く、皆そのときは、真面目に聞いている生徒達にタイミングを合わせて笑った。理系にいたので授業は皆「指名され読んで訳して、たまに一斉音読」だった。文系はもっと違っていたのかもしれないが知る由もない。英検の募集も理系は全くなかった。だから私は大学 1 年でも英検３級しか持っていなかった。

受験勉強は独学だった。英語は中学１年まで通っていた近所の公文式教室に東京理科大１年生のお兄さんがいてその人から『試験に出る英文法』一冊だけはやった方が良いとアドバイスをもらっていた。だからこの本を高校１年からとりあえず購入して、たまに読んでいた。それと単語はあの頃は学校から単語集はもらっていなかったので、自分で単語集を探した。見つけたのは『連想記憶術』という英単語の本。これで５００個を高校 2 年の時に覚えようとしていた。しかし高校 3 年になる時の英語の偏差値は 50 を切ってしまっていたと思う。模試の英語は全く読めなかった。まさにお手上げ状態で高校 3 年生になってしまっていた。

3 年になる春休みに「SIM 英語読解法」を藁をも掴む思いで購入した。アルバイトでためたお金を全部使って標準編と上級編両方買った。フレーズに切って頭から読んでいくという方法は目からウロコだった。TAPE でダン上野氏が解説してくれるのも凄く良かった。第１巻で「英語のリズム」について触れ、今まで聞いたこともない単語の中のリズムについて紹介しているのもこの講座に多くの者が魅了された要因だと思う。この講座は一度読んだ英文を毎日 30 分音読することが義務付けられていた。音読の重要性を説いたという点でも当時は画期的だった。そういうことを主張した高校生用の受験参考書は身近には無かったからである。夏休みには英語を読む感覚が身についてきた。そして何を勘違いしたのか、それまで理系で建築科の方面に進む予定だったのが、英語の教師を目指すことになっていた。この SIM の方法で授業をやりたいと思ったのである。フレーズ読みとフレーズ音読である。夏休み私は基礎からやり直したくなり、中学１年の教科書から高校 2 年までの全ての英語の教科書をスラッシュリーディングで読み直した。教科書にスラッシュを入れて「英文が醜くなるのが嫌だった」ので、私は赤鉛筆でスラッシュの代わりに切れ目に点を打って読んでいた。同時に単語も当時人気だった金ピカ先生（代ゼミの佐藤先生）の『ズバ単』というちょっとレベルの高い単語集を買って増やしていった。毎日繰り返し見たり音読したりして覚えた。時間がかかるので書いて覚えるということはしなかった。私の英語力は徐々に上がって行った。受験の頃には英語の偏差値は７０に届いていた。センター試験も 2

問しか間違わなかった。

ところが、センター試験は得意の数学と物理で簡単な問題でケアレスミスしてしまった。おかげで志望していた大学には行けず、絶対受かりそうな地方国立大学を２つ受けることになった。驚くことに私は 2 月の自由登校期間に教習所に通い初めたり、他の高校で就職決まった連中と遊びに行ったり完全に気が抜けたなめきった受験生だった。まあ、それでもＩ大学と S 大学には合格できた。親は喜んでいたが私は複雑だった。浪人させてもらえれば、それなりの大学に行けた自信があったが、経済的理由を言われて叶わなかった。もちろん私立は一校も受けていない。無駄なお金は使わなかった。

S 大学の入学式、学長が『皆さんの多くは本当は他に行きたい大学があったかもしれませんが・・・』云々の言葉を発した。当時国立大学は AB 日程で一つずつ受けられて、どちらかで第一志望を受けて、S 大学は滑り止めに受ける生徒が多かった。ますます残念な気持ちで大学生活をスタートしたのを覚えている。大学時代はかけがえのない最高の友人たちと出会い最高に楽しい時間を過ごしたが、はじまりは正直とても微妙な気持ちだったのだ。経済的理由で最初の 1 年間は自宅から 2 時間半かけて浦和まで毎日通うこととなった。今思えば寮に入るという選択肢もあったが、あの汚い４人部屋の寮に入る根性さえあの時の私には無かった。

４．大学時代

大学時代、私はとにかく英語は勉強しようと誓った。一般教養の英語の授業で私は初っ端から恥を書いてしまったからだ。一応、教育学部教員養成の英語英文科というところにいたのに、高校時代独学だった私は nothing という単語を何度も「ノウスング」と発音してしまった。クスクスと他の学部の学生からも笑われてしまったのである。なにせ地元高校時代は、英語授業中に英語読む時は、恥ずかしいのか、皆むしろわざと下手くそに音読していたような感じだったのが、大学では、皆素晴らしく上手に音読しているように聞こえ、自分も上手に英語っぽく一生懸命読んだつもりがである。だからやばいと思い、専攻である英語ぐらいはちゃんと勉強しようと最初に思った訳である。まず通学時間を使ってリスニングを鍛えようと思った。アルクのヒアリングマラソンを始めた。それと SIM のリスニング講座も始めた。最初の頃のアルバイト代は全て英語の勉強に当てた。英検も 3 級しか持っていないのはまずいと思ったので、2 級を大学１年で、大学２年で準１級を受けた。どちらも何とか合格できた。大学２年からは大学の側で一人暮らしを始めた。アルバイトは家庭教師と塾講とファミレスでやって経済的には余裕があった。英会話の「すぐできる」系の本は買いあさって読みまくった。

大学 3 年の時に英検１級を目指したが、とても無理だった。単語が覚えきれなかった。２

次のスピーチもとてもしゃべれる気がしなかった。そこで新宿まで ASA という英会話学校に通った。夏休みは富士山の麓で１週間英語の缶詰になる英会話合宿にも大金を払って参加した。ASA は週に何度行っても良かったのだが、グループでの学習でしゃべる時間が少なくあまり意味が無かった。英語合宿は短い期間だったが学習効果は高かった。様々なプログラムがあり、パターンプラクティス的なものから、スピーチ、リプロダクション活動など海外行かなくても半年続ければ会話とリスニングはそれなりになりのではないかと思うほどだった。また、この合宿は当時はバブルの頃だったから、会社から中間管理職の方々が送られてきていたので、そういう方々との交流も刺激になった。本当は日本語禁止だったが、管理職の人ほど別にそれほど英語しゃべれるようになりたいと本気では思っていなくて、夜はお酒飲みながら日本語でも大いに喋っていた。そのときまで私は、日本文学をあまり読んだことがなかったのだが、そこの人が皆、口を揃えて大学生時代に読まないと絶対ダメだというので、合宿終了後はとにかく有名な三島由紀夫、川端康成、夏目漱石などの聞いたことがある本は読みまくった。それと海外に学生時代に一人で行くべきだというので、親に頼み込んで百万円お金用意してもらって一年休学することも決めてしまったのもこの合宿が大きい。

５．オーストラリア

インターンシップ・プログラムスという団体の斡旋でオーストラリアに９ヶ月だけ滞在する機会を得て、次の年の４月よりオーストラリアのアデレードの田舎で小学生達に日本語と日本文化の紹介をするボランティアをすることになった。毎週日本語の授業を１回各学年に対してさせて頂いたが、皆すごく素直で、楽しかった。日本語は全く知らない、日本のこともあまり知らなくて、私は武道の達人だと思われていた。日本人全員が柔道や空手ができると思っていて、前回り受身を見せただけで滅茶苦茶喜んでくれた。当時流行っていた映画「空手キッド」の影響だったかもしれない。確か映画の中の師匠が日本人という設定だったと思う。授業は最初、本当に大変だった。私は、英語があまり上手に喋れなかったわけで、授業のセリフを紙に全て予想して書いて、覚えて授業に臨んだ。その準備した英語が正しかったかどうかは分からず喋っていたのだが、これは相当な英語の訓練になったと思う。語呂を使っての数字の数え方、身近な単語、日常会話的なものを毎回用意して覚えてもらったり、日本の昔話を劇に直してセリフを言わせたり、俳句を作って何かに応募したり、日本の歌を合唱したり、用意していったスライドをちょっとずつ見せて日本文化の紹介をした。地元の新聞に紹介されて、別の学校の日本語教師の見学者も何人かきて授業を見て褒めてもうこともあった。

向こうでは４家庭にホームステイをさせて頂いたが、皆とても親切で水上スキーやキャンプ等にもどんどん連れて行ってくれた。長期休暇は自分でひとり旅を計画したり、大陸縦断に便乗させてもらったりもできた。大陸縦断は途中アウトバックを通る時に、アボリジ

ニーのヒッチハイクに止められ車に乗せたため、お互いの片言の英語で会話も多少できた。向こうは日本人の私に興味を持ったらしく話しかけてくれたのだ。しかしこの時に強烈な体臭を体験して私の中にも差別の心があることに同時に気づかされたことを白状しなくてはならない。またオーストラリア人にとって中国人と日本人は区別がつかないようだった。中国人のグループを見て、「日本人じゃないの？」と同伴していたオーストラリア人に聞かれるたびに、あの頃の私は中国人と一緒にされるなんて何か嫌な感じが正直していたのだ。おそらく中国人を下に見ていたと思う。エアーズロックに登ることもできた。頂上が見えていると思って、若いつもりで駆け足で登って行ったが、それは頂上ではなくてまだまだ上があった。やっとの思い出ヘトヘトでのぼりつめると、それを見ていた外国人が「You did it！」と言ってくれたのを今でも覚えている。忘れられない言葉になった。今では聖地となって登れなくなったと、オーストラリア出身の ALT にうらやましがられて驚いたが確認はしていない。

オーストラリアには２冊の英会話の本と１冊の発音の本を持っていった。それだけは９ヶ月で最低完璧にしようと思い、どんどん日常の中で使えるようにしていった。発音はステイ先の子供たちを捕まえて何度も言っては直してもらった。何回やってもダメだったのは year の ear の区別と cards と cars だった。今もこれらはあまり自信がない。

オーストラリアにいるときに日本語をしゃべるのは月に一度の自宅への電話くらいで、嘘のように日本人には会わなかった。９ヶ月で日本人に会って会話したのは２回、一人で小旅行しているときに話しかけられた時だけだった。しかし向こうにいたとき思ったのは、逆に、日本にいても英語の勉強は十分できるということだった。海外にいてもずっと現地人相手に英語をしゃべっているかといえばそうでもない。実際は一人で頭の中で英語を作っている時間が長かったのだ。声に出さなくてもこれは十分できるので、日本にいてもできるという実感を得て帰国することとなった。

オーストラリアにいる時に卒論を書いてしまおうと思っていたので、頻繁にアデレード大学の図書館に通っていた。『時制と相への意味的アプローチ』がテーマだった。書いては学校の事務員やホストマザーに英文のチェックを受けた。「could は未来を表す」とネイティブは答えるだろうと予想して近くのネイティブ皆がその通り答えてくれて、大発見をしたかのごとく喜んだのが懐かしい。仮定法の話を絡めて「過去形は remoteness を表す」という仮説を説いていたのだが、今でこそよく言われているかもしれないが、あの時は大発見のつもりだったのだ。これと現在完了について詳しく触れたのが私の卒論だった。卒論がほぼ終了しての大学最終学年は、余裕の一年だった。もちろんその前に教育実習という５週間の忘れられない期間と教員採用試験が待っていたが。

帰国して成田から実家にタクシーで５０分程度だが、その時のラジオから流れる NHK のニュースの日本語を聞いて何故かすごく寂しくなったのを昨日のことのように思い出す。それまでは、毎日、新聞で国際面を隈なく読んで情報を入手していた。おかげであの頃が一番国際情勢に強かった。ちょうどソ連が解体した激動の年で、ニュースが面白い時でもあった。その突然のニュースがbreaking newsで流れたのもオーストラリアにいる時だった。リスニングに自信がなかった私が頼りにしたのは活字となった新聞しかなかったからだ。だから新聞をよく読んだし、読めるようになっていた。そんな生活が終わってしまったことに NHK のラジオで気づいたのかもしれない。

６．教育実習

卒論もほぼ完成していたので、復学してからは月に数回担当の先生に進捗状況を報告にいくのぐらいしか大学に用はなく、あとは一つ学年が下の後輩と 5 月末から付属中学に５週間教育実習に行くことだけだった。英語科は毎年学年に 16 名弱しかいないのでこれを前期と後期に半分に分けて、全員が付属中学での実習となる。前期組は就活あるいは７月に教員採用試験もあったので大忙しの日々だった。アパートも引き払ってしまっていたので、私は後輩の家に５週間泊めてもらってそこから実習に出かけた。実習中はかなり大変だと聞いて知っていた。実習終わって 1 ヶ月ではとても受からないと分かっていたので教員採用試験の勉強はオーストラリアから帰ってきた 2 月から 5 月のうちにかなりやりこんでおいた。だから実習中は実習に集中できた。朝 7 時頃にアパートを出て夜帰ってくるのは 12 時を毎日過ぎていた。指導教官も学校を出るのは毎日 11 時位だったと思う。指導教官もちょうど何かの発表の時期と重なっていて、本当に毎日忙しそうだった。パーマーのオーラルメソッドでやるのが絶対で、オールイングリッシュでやることもほぼお決まりだった。当時の先生方はサンシャインという教科書の背表紙に写っている有名な先生方だった。毎年多くの実習生が来るので私のことなど覚えていないだろうが、今は確か T 大附属に映られている K 先生が私の指導教官だった。オーラルイントロダクションで本物の人形を使っての腹話術で有名な先生だった。７５０ｃｃのバイクで通勤するのも格好良かった。面倒見の良い先生だったが授業には厳しく、指導案を毎回書かされては、ダメだしをされた。「なぜこの活動をここに入れるの」がいつもの第一声なので、常に一つ一つの活動の目的と理由を考えながら指導案を作るようになった。授業はたった 10 回と決まっていたが残りは授業見学が義務付けられた。放課後はひたすら指導案と教具を作った。授業機会は少なかったが、その分リハーサルはたくさんやった。放課後大学の教室に戻り、夜 2 時過ぎまで練習したことも少なくなかった。イッセー尾形が好きだったので、私はオーラルイントロダクションを一人芝居でやることが多かった。結構これは指導教官の受けも良く褒めてもらっていた気がする。また毎回最後に行う言語活動を考えるのが非常に大変だったが、優秀な生徒たちだったので何をやっても結構うまくいっていた気がする。

余談だが、私はウォームアップでルパン三世の歌を使って発音練習したり、しかも緑色のスーツを着たりしていたのであだ名は「ルパン先生」だった。

帰国子女もハーフの生徒もクラスに数名ずついて、英語の実習生は大変だった。私も一人帰国子女とは知らず、最初の頃に「heart と hurt の発音は同じだ。」と主張するので「それは残念ながらよくある間違いです。」と皆の前で訂正して恥をかかせてしまい、しばらくその生徒は口を聞いてくれなくて悩んだことを覚えている。５週間あったので時間が解決してくれて最終的にはその生徒とも仲良くなれたが、実習生の私としては結構心配になった大事件であった。
もう一つ実習では初日に英語の歌を挨拶代わりに歌うのが英語科のお決まりになっていた。今でこそリズム読み指導の際に英語の歌を授業中に歌うのは平気となったが、当時はものすごく緊張した。歌は「You are my sunshine」教科書に載っている歌だった。日本で人前で英語が話せるようになりたかったら、友人の前で英語の歌ぐらい歌える勇気ないと無理だよというメッセージを込めてのものだった。今でもこのセリフはよく使うものの一つだ。

なんとか５週間に及ぶ教育実習は終わり、ますます教師という職業へのあこがれは強くなった。そして残り 1 ヶ月、教員採用試験に向け、勉強を再開した。採用試験は無事合格できた。教職と小論文の他、リスニングテスト・ディクテーションとペーパーテスト、英語による面接があったが、オーストラリアから帰国してまだ半年だったので、スムーズに会話できたのも良かったと思う。リスニングも英検 1 級の過去問か何かで、ちょうど英検対策で聞いたことがある英文でラッキーだった。あの頃は一時試験が受かれば 2 次試験はよほどのことがなければ合格できた。今はこの後に面接と模擬授業があり半数が落ちるというので大変な競争率のようだ。

そしてついに、英語の教師として教壇に立つ日が来た。最初の学校は、H 高等学校。4 クラスが普通科で 4 クラスが工業科という特殊な学校だった。校長から赴任が決定して電話がかかって来たとき、最寄駅を尋ねると、電車は通ってないと言われ、同じ県内ながら初めて聞く地に戸惑い、電話を切ったあとにすぐに地図で場所を調べたのをよく覚えている。いわゆる陸の孤島と呼ばれている地域でC市から川を挟んで10分の場所にある我が県の最東端の町だった。

７．教員となって

一年目は本当に辛かった。生徒を席に座らせるのにも苦労した。2 年と 3 年の普通科就職クラスのみ担当だった。イメージ的に大変なのは工業化だと思っていたが、実際は普通科の方が数倍荒れていた。誰もやりたくないから、新採に押し付けるところが凄い学校だった。

授業開きで歌を歌った。実は歓送迎会は先立って行われ、私の前にいらした先生が最後の授業で尾崎を歌ったからお前も最初の授業で尾崎歌えと言われていた。尾崎豊の「愛の消えた街」を歌った。ギターを持って行って歌ってきた。皆よく聞いてくれた。最初の授業は意外といい感じだった。ところがである。次に教室にいくと誰も私の話を聞いいてくれない。というか皆勝って気ままなことをやっている。教室に入ったときから、チャイムなっても変わらずである。これが授業不成立だとその時知った。自分も中学時代に先生方に対して似たようなことしていたかもしれないとその時心から反省した。大声を張り上げても、一瞬しか変わらなかった。正直英語の授業どころではなかった。教室を見渡すと数名だが真面目そうな生徒たちもいた。その子達相手に、授業を虚しくはじめることとなった。そんな調子で夏休みまで情けないことに授業は少数相手に誤魔化し、誤魔化し行っていたと思う。教室に入る前大きく深呼吸して入ったのを覚えている。それだけエネルギーを使った。夏休み後、思い切ってフレーズ訳のマラソン形式に変えた。同時にガラス張り評価にして何をどれだけやれば「１」を付けないか「５」が欲しければどれだけやるしかないかを提示した。『英語授業への挑戦』が私のバイブルだった。農業学校の素晴らしい実践を元に書かれた本だが、私はこの本を偶然大学生の時、本屋で見つけて購入していたのだ。前述した通り、英文にいろいろ書き込むのは私には抵抗があったので、プリントは英文をフレーズごとに番号付けした形のものだった。プリント個別学習はそれなりに上手くいった。というより私のストレスは大部減った。やらない生徒もまだまだたくさんいたが、自力でやって次のプリントをもらいにくる生徒がいるだけで授業をしている気になれた。授業で色々話したかったような英語の話は教科通信を書いて配るだけ配るようにした。すぐに捨てる生徒もいたが、中には母親に見せている生徒もいた。それで満足だった。やらない生徒も最後の頃は必要最小限は提出してくれた。

そして２年目、地元に英語の授業研究サークルがあることを知った。その名は「XYZ」。新英語研究会にも所属しているようだった。月例会に参加するようになった。月例会はレポーターが一人発表すると忌憚のない意見が飛び交っていた。皆授業づくりに困っている先生方だったが仲間が集まり非常に元気をもらった。同時にこの頃、私は美紀子先生の本の中の「記号研」に興味を持ち、手に入る本を買いあさっていた。『入門シリーズ』と『英語にとって学力とは何か』『英語にとって授業とは何か』『英語学力への挑戦』である。そして記号の魅力に取り付かれ、３年目から教科書をマラソンプリントにして追試を始めたのだった。担任も持ち始めたので、生徒指導の問題も度々起こり疑問も多くなった。寺島先生に思い切って FAX で相談したのは英語のことではなく、生徒指導のことが初めてだったと思う。すると突然寺島先生からお電話を頂き、相談に直接のって頂いた。それが私が記号研に入会したきっかけだった。その後は毎年夏の大会に参加して研修させて頂き、日々の疑問点も直接、FAX 攻撃で直接指導を仰ぐようになった。レポートも毎年書くようになり、書くことで発見することも多いことに気づいた。教師５年目の時、卒業文集を生徒に

英語で書かせたが、H 高校生に原稿用紙２枚分の日本語を書かせ、それを英訳させることができたことは、私にとって大きな自信となった。記号研との出会いがなければ到底叶わぬ実践だったと思う。この実践は次の赴任先の F 高校でも３年生を出すとき２回追試したが、同じように無理なく実践することができた。この時に何度も読み返したのは『英語にとって授業とは何か』の寺島先生の実践であった。日本語を英語にしやすい日本語に書き換える方法というのは私の中では画期的だった。

F 高校では、やりたい実践は何でもできた。自由にいろんなことをできる学校だった。歌は毎回授業の初めに歌っていたし、リズム読みテストや歌のテスト、チャップリンのスピーチやキング牧師のスピーチも思う存分実践できることができた。

自分の英語を磨く余裕も持てた。単語集を使ってボキャビルをコツコツとはじめた。そして教員９年目の時に思い切って英検１級にチャレンジしてみた。すると 2 回目で筆記はなんとか合格。しかし２次のスピーチで脳死について問われ上手く話せず不合格となってしまった。悔しくて滅茶苦茶練習して、再チャレンジ。今度は教育制度についての話だったので結構楽に話せて合格することができた。実を言うとオーストラリアから帰国してすぐ受けたのだが、筆記も通らず落ちてしまっていた。この時は教員になってからの方が大学の時より英語力がついていることが分かり、凄く嬉しかったのを覚えている。実はこの時私は自分でも記号づけをして英語を読んだ。正確に早く英文を読む記号づけの効果を私自身が身を持って体験したのだ。集中力が増すのも感じたし、構文を素早く取ることもできたし、自信を持って選択肢を選ぶことができたのである。

F 高校には長く居すぎて、自分の授業のマンネリに悩んだ時期もあったが、教員１６年目の時、私 T 大学大学院に内地留学させてもらうチャンスを得た。給料をもらいながら大学院に通えたわけである。修論は記号研の研究をするつもりで行ったが、指導教官の許可をもらえず、論文の一部は T 大学教育研究会新人賞という名誉ある賞を取ることができたが『英語の語順知識と英文読解の関係』という少しずれた研究になってしまった。しかし、その過程で学んだものは大いに記号研のこれまでの実践の有効性を科学的にも実証できると信じるに足るものだったと思っている。

８．最後に

これまで記号研から頂いたものは計り知れない。恩返しの意味でも記号づけの効果の実証研究を何らかの形で世に残したいと思う。現在母校の進学校に勤務しているが、記号づけは、生徒自身が英語を読めるようになりたいと思っている今勤務している進学校でこそ最も効果があるように思える。そこで私の研究テーマだが、受験参考書的な本を記号づけ実況中継的解説で作るというのはいかがだろうか。音読ブームだが、受験生向けの英文をリ

ズム読みプリントで音読させれば、ただ音読するよりもっと効果があるかもしれない。おそらく英語のリズムはフレーズ形成に一役かっているはずというのが私の仮説だ。そういった付録をつけるのはどうだろうか。あるいは、進学校の学生向けの『記号づけ英語読解入門』を作るのはどうだろうか。とりあえず、私はこの２学期は『入門』用のプリント作りを始めたいと思っている。